

日本イギリス哲学会 第61回 関西部会例会

日 時：2019年12月21日（土）16:00～17:30

場 所：キャンパスプラザ京都 立命館大学講習室（6階・第1講習室）

交通アクセスは下の図でご確認ください。

報 告 1：16:00～17:30（討論を含む）

報 告 者：杉田 望（京都大学大学院 経済学研究科 博士後期課程）

題 目：ダニエル・デフォーと理神論争

例会の後、簡単な懇親会を予定しております。こちらにもどうぞお気軽にご参加ください。
また来年7月の部会報告をご希望の方は、以下の担当者あるいは事務局までお申し出ください。

関西部会担当

伊勢 俊彦（立命館大学、[tit03611\[at\]lt.ritsumei.ac.jp](mailto:tit03611@lt.ritsumei.ac.jp)）

竹澤 祐丈（京都大学、[Takezawa\[at\]econ.kyoto-u.ac.jp](mailto:Takezawa@econ.kyoto-u.ac.jp)）

*[at]を@に変えて下さい

<会場案内>

〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下る TEL 075-353-9111



<日本イギリス哲学会 第61回関西部会例会 報告要旨>

報告 1 : ダニエル・デフォーと理神論争

杉田 望

『ロビンソン・クルーソー』の作者として広く知られるダニエル・デフォー(1660-1731)は、晩年を中心に超自然を主題にした作品『悪魔の政治史』(1726年)、『魔術体系』(1726年)、『幽霊論』(1727年)を刊行した。

これらの作品が書かれた意図、デフォーが念頭に置いていた論敵について、先行研究においては、アリウス派、ソツティーニ派、理神論者、反三位一体論者、無神論者などへの反駁として書かれたものであると言われ、潜在的な論敵としては、アンソニー・コリンズやジョン・トーランド、マシュー・ティンダルなどが指摘されている。これらの人物は、いずれもイギリス理神論の代表的存在として位置づけられている。イギリス理神論は17世紀中頃から18世紀に展開され、理神論者は自然宗教を真の宗教とみなしてキリスト教批判を行い、啓示の必要性を否定し、理性による認識を重視した。

デフォーは神の現世への介入を認める立場をとっており、啓示に否定的な見解を示す理神論者とは意見が対立していると言えるが、理神論論争に関する従来の研究では、デフォーがその議論の中で取り上げられることはほとんどなかった。しかし、デフォーの宗教観は、同時代の理神論をはじめとするキリスト教のあり方を問う議論との関連が見出せるものであり、その見解の比較によって彼の宗教思想の特徴がより明確に見えてくると考えられる。

そこで本報告は、イギリス理神論論争の中で、デフォーの見解がどのように位置づけられるのかを検討するとともに、理神論とデフォーの関係性を考察することで両者の見方にいかなる影響があるのかを提示する。

(京都大学大学院経済学研究科、博士後期課程)